

## 「盗んではいけません」

エペソ人への手紙 4 : 28

June.16.2024

### エペソ人への手紙 4 : 28 (パウロ)

#### Preface

ここ何週間かに渡って、イエス・キリストにある霊の刷新とともに着る新しい人とはどういう人なのか、その内容と実践について見てきました。

今朝は、今読みましたエペソ 4 : 28 の「盗んではいけません」ということについて考えていきたいと思っております。

これまで学んできました「偽りを捨てる」とか、「隣人に真実を語る」とか、「憤ったままではいけない」など、またその次に出てきます 29 節の「悪い言葉を口から出してはいけません」というのは、「まあそうだろう」とあり得る内容だと思うのですが、「『盗みをしている者は、盗んではいけない』とは、まあなんと、そんなことまで言われなくちゃならない程の道徳的水準なのか？状態なのか？」と、奇妙に思えてしまうかもしれません。

実際にエペソ教会の信徒の中に、盗みを働きながら、生計を立てていた者たちがいたとも考えられています。

元々、盗みを生業にしていた人がクリスチャンになったにも関わらず、その手癖を辞めることが出来ずに、なおも続けている人たちが少なくなかったのか、または教会内で、盗みを働いている人たちがいたのか、その真相は定かではありませんが、使徒パウロが、「盗みをしている者は、もう盗んではいけません」と言わなければならないような、何かしらの状況があったのは事実だと思います。

まあ普通に考えますと、「クリスチャンになったんだから、盗みなんて当然辞めなければならないでしょ」と思ってしまうかもしれませんが、それしか生きる術を知らず、すぐにはそれを辞めることが出来ない程の不遇なつらい人生をそれまで生きてきたのかもしれない。

または単純に、ただ盗みを働くということが手癖のようになっていて、罪悪感からイエス様を信じるようになったはいいいけれども、中々その悪い習慣を断ち切ることが出来なくなっているのか、どちらなのかは分かりません。

#### Part One

ここで一つ私たち考えなければならないのは、人が、イエス・キリストを信じてクリスチャンになるということは、クリスチャンになったその瞬間、完璧な人・完全な人になるというのではなく、新しく生まれる、新しく生まれたということです。

新しく生まれるということは、一人では何もできない赤ちゃんとして生まれてきたということです。

新しく生まれたわけですから、まだ幼く、未熟で、弱くて、自分が何をすべきなのか、何が良いことで悪いことなのかを区別判断することが出来ない幼子・人、そのような状態から

始まるということです。

とかくクリスチャンと言いますと、「当然クリスチャンなんだから、それぐらいのことが出来るのは当たり前でしょ」と、なおも世間一般の倫理道徳的基準をもってその人を判断し、区別しようと、「その求めるレベルに達していればクリスチャン、達していなければクリスチャンではない」と、さらには、「達していれば救いは持続し、達していなければ救いが無くなってしまう」と考えてしまいがちかもしれません。

ですが、聖書、例えば第一コリントでは、色々な間違いしてしまっているコリント教会の信徒たちに対して「あなたがたはクリスチャンではない」とは一言も言わず、「あなたがたは、固い食物が食べられないお乳しか飲めないキリストにある幼子のように、あたかも御霊に属さないかのようなまだ肉の人ですね」と言います。

つまり、私たちが忘れてはならないのは、どんな人もイエス様を信じたら、幼い赤ん坊からスタートするということです。

なおも罪を犯すし、失敗もするし、葛藤もするし、転ぶし、人様が変わらず迷惑もかけるし、「え、そんなことまでしちゃの？」と思ってしまうようなことまで実際してしまう、してしまう可能性を大いに秘めてもいますし、皆、間違いを起こしながら、数えきれないぐらいの悔い改めとともに、その信仰が深められていき、赦しを知り、恵みを知り、自らの罪深さを知ります。

自らの罪深さと、それをはるかに勝る神の赦しと恵みを知れば知るほどに、認めれば認めるほどに、隣人の痛みだったり、弱さだったり、罪深さが我が事のように感じられ、共感し同情し、神の全く同じ恵みしか受けていない、同じように哀れだけれども、これ以上ない祝福を受け愛されている存在なんだということを共有しながら、一緒に祈っていけるということです。

正に2022年の主題聖句、「愛は多くの罪をおおいます」ということを、互いに実体験しながら成長成熟していく、誰もが幼子から始まるということです。

「愛は多くの罪をおおう」とは、罪の隠蔽ではありません。

安心して、主イエス様の愛ゆえに、赦しゆえに、救われたという確信ゆえに、または神の子として神の国を受け継ぐんだという信仰ゆえに、それまで見ることも、探ることも、認めることもためらっていたような自らの深い深い闇の部分を見、見つめ、探り、認めることが出来るようになった、正直になることが出来るようになった。

誰かに認められたくて何かを隠し続けるところから、神にはすべて、人には全てとはいかないかもしれないけれども、闇の部分、罪な部分を分かち合うことが出来るようになった。

そして分かち合った時に、新しい人を着ていることを、新しく生まれたことを思い出し、実感し、喜べる。

安心して、隣人とともに、その弱さ、未熟さを分かち合い、助け合い、互いに待ちながら、期待し合いながら、ともに祈れるようになったこと・なること。

それが、「愛は多くの罪をおおうからです」という第一ペテロ4：8の御言葉の意味ですね。

ヤコブの手紙5章に行ってみましょう。

## ヤコブの手紙5：16（パウポ）

ここにある「正しい人」とは、クリスチャンのことです。

キリストにあつて新しく生まれさせて頂いたすべての人のことを意味している言葉です。

葛藤しても、失敗しても、躓いても、なお罪を犯しても、キリストにあつて新しく生まれたことを自分にも他者にも忘れ続けない人のことを、自分のことも他者のことも諦めない人のことを「正しい人」と言います。

そんな者同士、互いに互いの罪を言い表しながら、互いのために祈るならば、癒しがあると言うんです。

この罪な世界を、罪ある者として生きて行く上で、これ以上力となり、励ましとなり、安心となり、たましいの潤いとなるものがあるでしょうか。

人は、何か物を貰うとか、手に入れるということよりも、知ってもらっている、見てもらっている、聞いてもらっているということだけで、十分に安心を得、力や癒しを得ることが出来ます。

むしろ、それが無いから、モノやコトに執着してしまうんだと思います。

出エジプト記3：7では、

## 出エジプト記3：7（パウポ）

と、神様イスラエルの民たちに語られました。

神様は、人にとって必要で大事なことは、見てもらい、聞いてもらい、知ってもらいことだということを明確にご存じで、それが力になること、癒しになること、救われたという思いに至ることを知っておられました。

カウンセリングや傾聴などが励ましとなり、回復へと繋がることも、元を辿れば、この神様の人に対する姿勢に由来するんだと思います。

私たちが抱く不安の根本にあるのは、自らの闇の部分を知ってはいるし感じてはいるけれども、どうすることも出来ない、そんな簡単に人に明かすことも知ってもらうことも出来ない、明かしたところで理解されるか分からないし、たとえ理解を示してくれたとしても傷の舐め合い程度で、根本的な解決や癒しにはならないだろうことに何となくだけれども、本能的に気付いている。

その悲しい気付きが、私たちの抱く不安の根本にあるんだと思います。

でも、キリストにある幼子であるという自覚を互いに共有し、ともに互いのために祈るならば、癒しがあるというのです。

私にとって、結婚する前は、クリスチャンの友人たちが、互いの罪を言い表しながら、互いのために祈り、癒しを経験する尊い存在でした。

平日の聖書の学びの集まりの後で、友達の家で辛ラーメンを食べた後で、私の住んでいたアパートの部屋でキムチチゲを食べた後、自分たちのことを分かち合っ

した。

結婚してからは、妻が、そのような存在になっています。

## Part Two

エペソ書の著者である使徒パウロ先生は、私たちが倣いたい敬虔な信仰者・クリスチャンだと思いますが、当のご本人は、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」（ローマ7：24）と人前で吐露する程に、自らの罪深さと日々向き合い、正直に告白する方でありました。

そうして、主イエス様の贖いと赦しと救いが、どれだけ偉大なことであり、どれだけ感謝なことであり、知恵深いことであり、恵み深いことであり、あわれみ深いことであり、ただただ神の愛でしかいないことを毎日知って行かれたんだと思います。

知れば知るほどに、自分の中で誇れるものがどんどんなくなり、以前は誇れるようなものだったり、出来事だったり、功績だったりしたものが、ちりあきた・汚物以下にしか感じないほどに、主イエスにあって新しく生まれさせて頂いたということが、どれだけ物凄いことなのかを知って行ったんだと思います。

だから、今日の御言葉エペソ4：28でも、ただの一言も、盗みをしているだろう人、盗みを働いてしまっているだろうクリスチャンに対して、「あなたはクリスチャンではない」とか、「あなたは救いを失った」とか、「あなたはもう神の民ではない。地獄に落ちる、何て悪い人なんだ」なんていう、裁くような言葉は一言も発しません。

むしろ、励まします。

その行為を改めることが、挽回することが出来ると、取り返すこと出来ると、慰めと労りをもって力づけます。

「盗んではいけない」と、消極的な内容から話し始めますが、「困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、苦勞して働きなさい」と、積極的な内容へとその勧めを展開させます。

決して切り捨てません。

「真つ当な責任と努力と汗水流しながら日ごとの糧を得ていくその尊い過程の重要性を無視して、正当な努力もなしに、その尊い過程をないがしろにしながら、結果だけを手に入れようと、実際に誰かが真つ当な責任と努力と汗水流すという尊い過程を通して得た結果をかすめ奪うかのような生き方から、分け与えるという神の恵みを意識した信仰に立って生きることを知りなさい、そう生きなさい」と、期待を持って語り掛けて下さいます。

盗みという行為が、行為にのみ留まるのではなく、根本的な価値観や生き方姿勢から出ているんだということを論じて下さいます。

人は誰もが、クリスチャンになったとしても、右も左も分からない、弱くて、未熟で、当然失敗を繰り返しながら、成長成熟していく新しく生まれた幼子です。

完璧な人として、クリスチャンになる人なんか存在しません。

むしろ、イエス様を知り、信じ、救いに与った者たちは、イエス様の前に取るに値するものなんか何もないという毎日の自覚の積み重ねとともに、生まれたばかりの赤ん坊を親が、

「この子のためなら何だって出来る！」と思うほどに愛する愛、いやそれ以上の愛をもって見ておられる父なる神の愛を知り、イエス様の愛に抱かれ、三位一体なる神の愛ゆえの安心を生かされて行きます。

そして互いに、その安心の下生かされているということを共有して行きながら、一つとなってキリストにある成熟した大人になっていくわけです。

だから、パウロ先生の言葉には、一切の切り捨てがありません。

そこにあるのは、期待です。

一人の人が、神の愛のうちに完成されて行くことに、近道がないことを聖書は語り続けてくれます。

長い時間、色々な過程を通りながら通らせられながら、ようやく一人の成熟したキリストにある大人となっていくわけです。

アブラハムも、ダビデも、ノアに至っては、救いの箱舟に実際に乗るまでに、100年という歳月を神様お掛けになりました。

### Part Three

エペソ書4：28でパウロ先生は、所謂、人の物を盗むという実際の泥棒行為のみならず、もっと本質的な、霊的な、神の前にどう生きるのかという態度や姿勢、生き方についてこそ、教えようとしておられるようにも見えます。

感動的な説教を何度か聞き、感動したことによって、一瞬にして素晴らしいクリスチャンになるとか、何かのために祈って頂いたら、一遍に一気に望んでいるような何か良い結果が生まれることを願ってばかりいるとか、自分がやるべきことをやる代わりに、人がやるように仕向けるような楽な信仰生活を送ってみようとする心持ちだったり、自分の未熟さは棚に上げて誰かを排除することをもって自分はやるべきことをしたと安易に思ってしまうことだったり、その未熟さを、信仰を持って真剣に向き合う代わりに、それを補ってくれるようなものや人ばかりを求め、探し、たたき、負うべきキリストにあるくびきを負おうとはせず、たましいの安らぎという名目の下、「わたしがあなたを休ませてあげよう」というイエス様の言葉を都合よく利用することばかり考えて、出来ない理由ばかり探し、やるべきことを避けながら、おみくじの大吉を大切に財布に入れてその大吉がいつの日か実現することを願うような短絡的なご利益ばかりを求めるような信仰姿勢こそ、霊的泥棒であり、盗みであることを教えておられるようにも見えます。

信仰とは結局、「神の前にあつての私」です。

私の周りにいる人を、どんな理由によってでも担ぎ出したり、言い訳にしたりすることは出来ません。

例えば、いい学校とは、どんな学校のことでしょうか？

いい先生がいる学校でしょうか？

いい図書館、いい施設やいい教育プログラムが整っている学校でしょうか？

もちろん、それらの要素も大切ではないとは言えないでしょう。

でも根本的に、その学校がいい学校なのか、そうではないのかを決めるのは、そこにいる生徒に掛かっていると思います。

テストの点数を取ることが学校の良し悪しを決めるのではないということは、重々承知しているつもりですが、例えば、進みたい進路があり、そのためにテストの点数を取りたいと目標を定めたならば、「勉強は頭でするものではない。お尻でするものだ」と、どれくらい机の前に座り続け、与えられているその目の前にある教材と真摯に向き合いやり抜けるのか、辛くても、苦しくても、その与えられたものの中で、出来ない理由を他者や環境に求めるのではなく、自分自身に求めることが出来る腹をくくった生徒がどれくらいいるのかが、その学校がいい学校なのか、そうではない学校なのかを決める一つの物差しになると思います。

教会も同じような面があるように思います。

どんな教会がいい教会なんですか？

立派な牧師、立派な礼拝堂、立派な施設、立派な土地、または人がたくさん集まっているというような条件があれば、いい教会なのですか？

もし、楽しい喜びに満ちた信仰生活を、牧師や施設や置かれた環境などの条件が整うことに求めて、私がすべき聖書の御言葉と向き合うこと、私がすべき聖書の御言葉を生きること、私がすべき祈りを祈り続けること、私が働くべき働きをすることなどは棚に上げて、いい教会の条件を自分以外のところに求めるならば、それも盗みになるでしょう。

神の前に立ついちキリスト者としての霊的研鑽や主に仕えるということなしに、結果や収穫だけを求めるならば、それも盗みになるでしょう。

私たちが意外に陥りやすい霊的泥棒行為ではないかと思います。

「愛されてるから、愛されてるから」と、「癒しだ、癒しだ」と、「喜びだ、喜びだ」と、他力本願的なことばかりを唱えているならば、「それも盗みになる」と使徒パウロ先生は語ります。

古い人を脱ぎ捨て、霊と心において新しくされ続けながら、新しい人を着るというのは、無自覚な霊的泥棒行為を自覚し、自覚したならば辞める決心をし、額に汗水流さずに、喜びや楽しみだけを得ようとする盗みからの脱却を試みることです。

そしてむしろ、神から毎日恵みを与えられていることを覚え、「私も他者に分け与えることの出来る者だ」という自覚と、その自覚を行動に移すことの出来る人が私自身であるという人がいるのかいないのかに、その教会の良し悪し有り様が表れるのだと思います。

エペソ教会を含めた初代教会は、いい条件どころか、そうでない条件ばかりだったと思いますが、神の前に立ついちキリスト者としての一分を全うすることを諦めませんでした。

「武士の一分」という映画がありましたが、武士だって一分を守るんですから、ましてや、キリスト者はなおさらですよ。

#### Part Four

神を信じるという信仰において近道はありません。

苦みも甘みも味わわなければなりませんし、死の影の谷を通過こそ、神様が私たちに望んでおられるところへ至るんだという事実を、聖書は包み隠さず語ります。

なのに、何だかおかしいことに、そのことは包み隠して、良いことばかり聞きやすいことばかりを語ろうとするメッセージだか、何だかが溢れているような気がしてしまうのは、私の高慢な姿勢ゆえなのかと、ここ最近、毎日思い悩んでおります。

私たちは危機に陥ってみないと、何が大切なことなのかを逃してしまいます。

聖書は決して、安易な安らぎや癒しや慰めなどは語らないですね。

もちろん、凹んだり、気落ちしたりしている時に、聖書の言葉から励まされること数知れずですが、聖書は、一度も表面的な楽しみや喜びを語ったためしはありません。

私たちが聖書の御言葉が読めてこないというのは、棚から牡丹餅のような気持ちで安易に霊的盗みを働こうとする、私たちの甘っちょろい、御霊ではなく肉に属しているかのような肉の思いが、聖書の語ろうとしている言葉をねじ曲げてしまっているからなのかもしれません。

そんな私たちの霊的手癖をよく知っておられるからこそ、聖書66巻をギュッと絞ったら出て来る濃いエキスであるモーセの十戒の中に、「盗んではならない」という単刀直入な、意味深長な言葉を神さま述べなされたのかなあと思います。

### 出エジプト記20：15（パワポ）

神からの十の戒めのうち八番目の戒めが「盗んではならない」ですが、モーセの十戒の第一戒から第四戒までは、「唯一絶対の神のみを、神としなさい」という、天地万物の秩序から考えますと、本来ならば至って当たり前のことを語っています。

でも、この「唯一絶対の神を神とする」という当たり前のことが出来なくなってしまったこの世界。

そんな世界に生じたのが、「盗み」だということを、モーセの十戒のその並びが教えてくれます。

つまり、そもそも、「盗み」ということ自体が、神から離れてしまった人間だからこそ行ってしまう罪なる行為だということです。

神に対しても、人に対してもです。

レビ記25章で、「土地はわたしのものである」と神さま仰いますが、そんなことは露も知らないかのように、世界地図を見ますと、国境線だらけ、その国境線に従ったそれぞれの国の領土を誇らしく自分たちのものだとして主張しているかのような国旗がずらっと並んでいます。

実際に、地続きの国と国の境である国境に行ってみますと、人間が作った巨大なバリケードのようなものはありますが、世界地図にあるかのような線は、山や川や海や土地には一切引かれておりません。

全部、人間が作った、神から盗んだことを正当化するかのような人工的な線があるばかりです。

国同士、民族同士、地方同士の領土を争う戦いのみならず、神の所有を全く認識しないか

のような乱獲、伐採、汚染、破壊を経済活動という大義名分の下、我が物顔で堂々この地が滅びるまでし続けるだろうそのことが、神からの盗みであることを知りもせずに行っていること。

主要経済大国という国々の経済力を支えるために利用され、こき使われていた人々や貧しいとされていた国々がいつのまにか経済的に豊かになり、物価が上がり、国家間のその貧富の差が、国家間の貨幣の価値の差が縮まろうとすると、「そうは問屋が卸しません」というように、経済大国と言われる国たちの物価を上げ、貨幣の価値を高め、いつまでも利用する側と、利用される側の国際的な主従関係を変えさせないごさかしいことをし続けながら、それでも体裁を整えなければならないので、多少の「困っている人に分け与える」ことはしても、真に「困っている人に分け与えるような、平等になってしまうような生き方は出来ない」と、そんな地球規模の経済システムを構築して、神から盗みを働き続けている人類。

そりゃ当然、聖書の言う通り、この世界は滅びて行くことでしょう。

そのサイクルの中に、私たちも組み込まれ、そのシステムの中に入らなければ生きずにはいられないという、悲しい性も正直に見つめなければなりません。

それでも、パウロ先生は、主なる神様は、「盗んではいけません」とお語りになります。

「困っている人に分け与えるために、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい」と、主イエス様が再び来られる終末のその時まで、霊的にも物理的にも、あたかも、主人の財産をあざとく用いて人々に分け与えた不正な管理人のように生きることを、大きな寛容をもって勧めて下さいます。

### ルカの福音書16：1－13（パワポ）

神からの盗みを働かずにはいられないこの世界と私たちに対して、神様は、イエス様は、「主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた」という寛大寛容さをもって私たちに、「なおわたしのものを盗んでいるという面からすると不正かもしれないけれども、それでも困っている人に分け与えるために、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい」と勧め、そのようにした時には褒めてまで下さると約束されます。

「神のものを身勝手に消費しているという不正の富で、自分のために友をつくりなさい」とまで言って下さいます。

さらには、「ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょうか」とまで言って下さりながら、「この世の朽ち果てていく富に対する信仰的な態度や姿勢が、神様が引き継がせると約束して下さっている天の御国という相続、神の国を受け継ぐというまことの富にまで繋がるんだ」と教えて下さいます。

私たちキリスト者にとっての「盗んではいけない」という教えは、「ただ、物を盗んではいけない」というそんな単純な表面的なものではなく、そこには、物凄い神様のビジョンがあり、神のものの見方に立つことであり、まことの霊的世界観をもってこの世界を見、私という人を見、人を見ることですね。



聖書は私たちに、「盗み」というサイクルの根本が、神の前にある私たち人間の霊的未熟さ、幼さ、無知にあると教えてください。

そして、その「盗み」という本質について教えられ、諭され、悟ったならば、私たちは、霊的な問題から肉的な問題に至るまで、「盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるために、自分の手で正しい仕事をし、苦勞して働きなさい」という御言葉をやるうとする決心、また実際に行うことが求められています。

### Conclusion

主イエス様が2000年前に来られてから以降のキリスト者や教会は、誰一人として、「春ではなく、冬だから寝かせておいてくれ」と、いつまでも言うてはられないでしょう。なぜならば、この2000年間ずっと、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。収穫は多いが、働き手が少ない」という言葉が、全地に鳴り響いているからです。

芽を出し、花を咲かせ、実りを実らせ、またさらに成長し、その一本の木の下で、人々が休み、鳥がさえずり、実を食べて、生き返るということが起こって行かなければならないですね。

もちろん、そのすべてが、不正な管理人の行いを大きな懐をもってほめてくれた主人のような神様の恵みによるものですが、その恵みを数え、覚えることを習慣にして、イエス様からし種の例えに出てくるような木になっていくのです。

一人一人が。

「いやいや、私にはそんな木は無理です」と思ってしまうかもしれませんが、力なく自然と落ちていく落ち葉でも、その下にある土地を肥やすことが出来ますし、落ち葉がなければ、新しい芽は出て来ません。

人を温める薪にだってなれます。

教会というところは、そのような木々によって成り立ってきましたし、そうなるようにイエス様がデザインして下さいました。

そして、そのデザインは、この世に対するモデルです。

一人では何も出来ないということを教会に来て学び、教えられ、慰められ、力を受けるところが教会であり、そのことのために、それを体現するために私たち一人一人が神様から召し出されています。

そんな祝福の場に、今、私たちは召し出されております。

恵みを受けるだけ受けて逃げるならば、それは盗みになります。

恵みを受けたならば、行動で示していきたいと願います。

最後に、第一ヨハネ3章の御言葉を読んで終えたいと思います。

### ヨハネの手紙第一 3 : 17 - 18 (パウロ)

お祈りいたします。

祝祷：エペソ4：28